

第三章 本市第三方面

萬代町―不老町―翁町―壽町―松影町―吉濱町―長者町自一丁目至四丁目―三吉町―千歳町―山田町―富士見町―山吹町―永樂町―眞金町―南吉田町―堀内町―磯子町―瀧頭町及根岸町堀割川以西―山下町―境町―港町―眞砂町―尾上町―常盤町―住吉町―相生町―太田町―辨天道―南仲通―本町―北仲通―元濱町―海岸通―新港町―中村町堀割川以西―蒔田町―大岡町―岡村町―扇町

第一節 一般狀況

第三方面は、關内の全部、その西に續く釣鐘新田の新吉田川以南、その西に連なる大岡川以南、即ち蒔田大岡堀内瀧頭磯子岡村等の各地を包擁してある擴大な區域であつて、一帯に平地と丘陵地である。平坦地は、概ね埋立地であるが、繁榮の街で、商店が澤山ある。丘陵地はいふまでもなく住宅も少ない。一般の地勢から見ても、此度の大地震の影響が甚だしかつたといふことは推知されるであらう。殊に本方面中、市内一等地の關内地域は、他に較べるところのない程、被害は慘烈さを極めた。大きな洋館大商店等は、第一の激震で、悉く粉碎し、倒潰した。次で起つた猛火の爲めに、悉く燒盡した。繁華

な街は一帯に廢墟と化して、復興容易ならざる状態に陥つたのである。

釣鐘新田地域は、關内地域とは異なり、建物が概ね木造なので、地震には大被害を受けなかつたが、火災に依る被害は大きく、一帯に甚大で、忽ち各街は焦土に化したのである。その他の地域中、蒔田大岡方面は、被害は比較的輕微であつたけれども、火災は遂に免るゝこと能はず、その中央に連なる大部分は焦土と化した。本方面内に飛地を成して包擁されてゐる根岸町の一部及瀧頭磯子方面は、地震は輕微であつたが、刑務所の倒潰燒失に因つて、甚大な被害を受けたのみならず、其の他所々部分的に、火災を伴ふた。堀内町は、被害は大體に於て、各地域と大差はなく、火災も亦免れて、震災の影響は輕微であつた。岡村町は、震災そのものが極めて輕微で、倒潰もなければ、全然火災も起らなかつた。丘陵地だから尤ものことであらう。而し此の邊の丘陵地は、諸所に崖崩れを生じ、殊に蒔田町堀内町磯子町等に於て甚だしく、磯子町は、被害を出した。區内で最も多く死者を出したは、いふまでもなく關内各街で、その數は四千數百名の多きに上ほり、裁判所は、壓死者百餘名、正金銀行前は同じく百名の燒死者を出した。その他吉濱町の河岸、永樂町、眞金町遊廓、根岸刑務所の如きは、何れも多數の死者を出した。

直後、横濱公園は最も適當な避難所となつた。釣鐘新田方面に於ては、區域外の中村

町の丘地に避難した者が極めて多く、その人数は三四萬に達した。其の他地域は丘地が多かつたので、さして困難は感じなかつたやうである。住民は刑務所の開放で不安を抱いたが、別に事件といふやうなことは起らなかつた。

各地域の状況は順次述べることにする。

第二節 關 内

關内は、横濱港が開かれた頃からあつた町で、以來今日まで商業及び通商貿易の中心地とされてゐた。徳川末期幕府がこの邊を市場として開いた際、入口に通行者の檢閲所を設けたので、其の構以南を關内といふやうになつたので、兎に角古い町である。當時は會社銀行商館商店旅館等の大建物が澤山あつた。又この邊は港に近かつたので、海運その他總て港に關する仕事は此處を中心としたので、常に雜沓し、賑ふ街であつた。この邊は昔海潮の干満した處で、開港後埋立をして造つたところであるから、地盤が弱いのは當然である。十二年六月、加賀町警察署の調査に據ると、關内全部に元町を含んだ、戸數は五千七百四十六、人口二萬六千六百二十五外國人四千五百四十四を含むであるから、此戸口數より元町の分として約一割を引いた數が關内全部の數であると思つてよいだらう。併し

關内各街は、官公署、會社、銀行、商館等多い爲め、通勤者の數は人口に數倍で、震災當日も數萬の人が來て居たのである。

地域の中央にある横濱公園と、其の東に通ずる日本大通によつて、關内は南北の二區に分たれてゐる。關内北部は普通の街で、關内南部は居留地と呼ばれた外人街である。尤も近年は内國人も多く居住してゐるが、外人經營の會社、商館が立ち並んで、多くは西洋風で、一部は支那式であつた。外國貿易殊に輸出貿易で世界的な貿易港である。横濱港は、此關内一帯を活動の中心地としてゐたのであつたが、大震災の爲めに、此の地が全滅した時には、貿易界並に經濟界が大打撃を受けたことは勿論で、横濱市の致命傷であつたのである。

横濱公園は面積約二萬坪で、樹木花草を植ゑ、泉水や噴水あり、市民の唯一の遊場であつた。同公園は、市内で主要な避難地となつて、數萬の市民の生命が辛くも救はれたのであつた。本地域大部分は埋立地で、弱いばかりでなく、煉瓦造の大建物が多かつた爲め、激震の襲來と同時に、建物の約八分通りは一瞬の間に倒潰した。震後間もなく各所より發火し、折柄の烈風に火勢を強めて、僅か三四時間の内に關内關外に亘る一帯は焦土と化したのである。その時地内の街路を歩いてゐた人や、會社等に在勤中の人々の

中には、壓死した者、焼死した者、負傷した者が數千もあつた。當日、關内に於ける遭難者の數は、到底正確に計上し難いが、加賀町署の調査に據れば、四千七八百人といふことである。一家全滅は、九十二戸の多きを算した。兎に角全市で一番被害の多かつた所である。

第一項 關内西北部

關内西北部は、其西南に大岡川支流があつて、關外諸街と界してゐる。東南には縣廳生絲検査所、横濱公園等を通じて、東南部の山下町に連なり、東は港内に直面してゐる。本地域には西より順に港町、真砂町、尾上町、常盤町、住吉町、相生町、太田町、辨天通、南仲通、本町、北仲通、元濱町、海岸通の十三街があつて、別に南に境町がある。此邊は一帶目貫きの場所であるが、町幅が狭い爲め大被害を被つたのである。各街はどこでも大商店が軒を並べてゐるが、別けても本町、辨天通の二街路には、會社、銀行等多く、大きな建物が多くあつた。海岸通りより新港町一帶は、横濱港の埠頭で、税關があつた。岸壁には常に大船が横付けになつてゐる様は、貿易港としての盛であつた。税關右の馬車道は、車馬貨物自動車等絶えず往來して、日々大混雜を呈してゐた。突然大地震が起ると同時に、特

に堅牢な建物數十戸を除いて、殆んど崩壊した。しかし山下町と異なり、半潰のものが多いが、少くなかつた。殊に新しい建物であつた縣廳市役所、開港記念會館、基督教會館、石川組建物等は何れも内部を焼かれ、外形のみを残してゐた。従つて一部の崩壊のため、死傷は頗る多く、生理となつた者も數知れない。火災は忽ち城内約二十箇所から起り、折柄の烈風に勢を得て、海岸方面に延焼し、數刻經たぬ間に四邊一面は火の海となつてしまつた。その時所々に、旋風が起つたが、其の著るしきものは、午後四時頃北仲通の裁判所附近に、五時半頃境町に、六時頃市役所裏及び正金銀行の西側に、六時半頃馬車道に起つたのであつた。何分にも各街とも道路狭き爲め、壓死を免がれた者も遁げ途に迷ふうち、火焰に包まれて焼死した。殊に川崎銀行側、正金銀行表門、縣廳構内の如きは、死屍累々とし、其の數數十乃至百餘を算した。港内沿岸や、吉田橋附近の川中には、無慘な溺死體が水面を覆ふてゐた。溺死者の中には、親子、夫妻などが多いらしく、抱き合ひ或は手をつなぎ合ふなど、傷ましい程であつた。家人が生埋になつたり、四肢を棟木に挟まれてゐるのを、救ひ出ださうと焦つても、到底其の邊なく、涙ながら逃げた者、或は一且は逃げ出したものゝ、再び引還して、家人と運命を共にしたとかいふ哀れな話もある。北仲通なる横濱地方區兩裁判所に於ては、所長始め判檢事以下の官吏、備人、辯護士訴訟

關係人、傍聽人等百餘名の死者を出だした。其の他多數の死者を出だした箇所や、屍體の累積した場所凡そ二十以上を擧げると、本町一丁目横濱郵便局で九十人、同一丁目神奈川縣廳構内で四十人、尾上町馬車道電車交又點附近で三十人、辨天通三丁目原合名會社で二十二人、住吉町五六丁目の境なる俗稱六道の辻で二十二人、相生町五丁目川崎銀行附近で八十人などである。關内各街には幾多の藝妓家、料理店、待合等も尠くない。關内藝者は百四十一名中十九名の死亡を出だした。此地域で焼失した重なる建物は、官公署では横濱税關の大部分、神奈川縣廳中央電話局、生絲検査所、横濱地方及區裁判所、横濱市役所、横濱郵便局、逓信省航路標識管理所、海軍部横濱出張所、會社銀行では日本郵船會社支店、横濱正金第一、第二、第三、第五、第一百、住友、左右田、若尾渡邊等の各銀行、原合名會社、横濱取引所、商店では若尾小野、澁澤、大谷、朝田等の各商店、サムライ商會、其の他では横濱開港記念會館、本町小學、横濱小學、校、横濱貿易新報社、横濱海潮新報社、横濱基督教青年會館、指路教會、眞砂町市場等で、以上の中には、倒潰の上、燒失したものもある。又半潰、大破、小破の程度の上で燒失したものもある。右大建物の中、税關を除くの外は内部は全部燒けて、外廓だけが残つたのである。川崎銀行、石川組、澁澤倉庫、小野商會倉庫、三棟等は、完全なる建物であつて、逸早く戸を締め切つたので、倒潰はいふまでもなく、類焼しなかつた。

こゝに遭難した知名な人は横濱地方裁判所長判事末永晃、庫判事宮本安藏、同西田尚義、檢事田中卓一郎、同瀬戸覺三郎、同太田國雄、同丹波良忠、同福鎌文也、同小野廉平、同小菅省三、同卷一郎、横濱刑務所典獄補内山久太郎、供託局事務官關讓、同渡邊隆雄、同森光陰、辯護士佐藤博愛、同二見友三郎、高久忠一、山口喜三、太竹内葵、柴田基二、國重貞能、新居茂、片山藤平、篠田武雄、同宗尚喜、航路標識管理所長吉岡兼三、横濱税關検査課長早川繁雄、横濱郵便局電信課長橋本忠藏、神奈川縣測候所長朝倉慶吉、横濱刑務所庶務課長井澤健次郎、市會議員飯田久松、山下町郵便局長早川松五郎等の諸氏である。

本町辨天通南北仲通邊は、其の一部が開港以前から陸地で、地盤が比較的堅固なりし爲、地面に龜裂を生じなかつたが、その他には無数の地割陥落を生じた。殊に港町河岸は最も甚だしく、其の大なるものは幅三四尺もあつた。各街の一丁目乃至三四丁目の者は、主として横濱公園へ、四五丁目の者は、萬國橋を渡つて、新港方面へ、或は大江橋を渡つて、東横濱驛構内へ逃れ、少數の者は正金銀行内に入つたものもあつたが、中には逃げ損つて燒死した者は無數にあつた。辨天大江吉田萬國新港の五大橋が破壊しなかつたことは、此地域の避難者に取つて幸ひのことであつた。公園内に入つた者は概して助かり、重傷のまゝ、擔ぎ込まれて死亡したのが多少あつた。當時園内は關内、關外各方

面からの避難者數萬で埋められた。附近の水道破裂した爲め、公園内には水が三尺位溜まつたので、却つて安全な避難地となつた。やがて旋風が起つて、焼屑が雨のやうに降つて來て、樹木や積置の木材に燃え付き、園内社交俱樂部や圖書館や市役所分室なども焼け落ちたが、池のやうな水溜りの中にゐた人々は水に浸つて、熱氣に堪へてゐる中に火は次第に鎮まつたので、東京被服廠のやうな大慘禍は免れたのであつた。三日となり四日となるに及び、此等避難民中、他街の人々と雖も、震災三四日後、避難民の多くは自分の園や、知人の所などへ、行つてしまつたので、到底市内恢復は見込みがないやうに思はれたが、配給品なども各地から集り、やがて、當局の力に依つて、復興事業が開始されることになつたので、避難民は續々と歸つて來た。そして町民協力して、復興事業に盡したので、一年後には假建物ながら、各町共元の通りになつたのである。近く政府と市當局の手に依つて、區劃整理が始められるから、やがて震災前より遙か優れた道路建築が見られるであらう。

一 港 町

港町は關内の西端に位し、片側は大岡川に沿うてゐる。四丁目と五丁目との間は、市

内交通の要衝たる馬車道である。一丁目には、市役所や魚市場などがあつた。二丁目から四丁目には、各種の間屋、運送店などが軒を並べ、五六丁目には、指路教會の煉瓦建、其の他倉庫などがあつて、小建物は少なかつた。五丁目の掘越運送店では妻だけ助つて、主人と子供が六人死んだ。町民の大部分は、横濱公園内に避難した。吉田橋は、關外方面から櫻木町、神奈川町方面へ避難する唯一の通路だったので、橋上は人で群つた。遁げ後れた人々の中には、火に追はれて川に落ちて死んだ人も多くあつた。一年有半後の建物數は六十有三である。

二 眞 砂 町

眞砂町は尾上町の西で、公園前から馬車道までが、一丁目から四丁目である。二丁目乃至四丁目には、各種の間屋や取引商や商店が軒を並べ、戸數二百五を有してゐた。家は約七分通り倒潰した。間もなく一丁目の魚市場より發火し、隣町よりも延焼して、全町悉く焼失した。町内の死者は七十三名であつた。一家全滅と一家で幾人もの死者を出した家とは、一丁目の牛肉店竹内慶太郎方で、夫婦娘養子姪養家の父の六人及下婢二人。石塚蒲鉾店で、夫婦外家族五人及雇人二人。二丁目の鈴木笹店で、夫婦及子供

二人。野村政次郎方で、夫婦娘及孫。坂井天麩羅店で、父及子供三人。鳶職大河原磯之助方で、夫婦母娘何れも焼死した。理髪業小田切松之助氏は一旦遁げ出したが、髪を刈つてゐたお客のことを案じて引返へし、第二震で其の客と共に壓死した。町民の多くは、公園内に入つて避難した。

三尾 上 町

尾上町一丁目から六丁目は、横濱公園から大江橋までの電車道に添ふ街で、戸數三百四十七、人口一千七百八十二名であつた。家屋は第一震と第二震とに全部倒潰した。僅に一丁目の基督教青年會館、五丁目の渡邊銀行支店及千代田生命保險會社支店等は、大破損をしたが、倒潰はしなかつた。一丁目四番地、七番地の地先には、四尺強の龜裂を生じ、地盤二三尺陥落して、汚水が浸出した。五丁目の電車交叉點附近、六丁目の大江橋附近、其他全町到る所四五寸位の龜裂を生じた。一・二・三丁目は、眞砂町方面から襲ひ來たつた火炎に包まれ、四・五丁目は常盤町方面から延焼し、六丁目は六道ノ辻附近から發火した。折柄吹き募つた南風に煽られて、火力は強く、人々は逃げる暇もない位であつた。一部の町民は、主として公園地に逃げ、一部の町民は、東横濱驛構内に遁げた。而し

誤つて、吉田橋方面に往つた者は、途中で焼死したり、溺死したものが尠からずあつた。午後五時頃、風向きが變ると同時に、旋風は突如海岸方面から襲つて來て、瓦礫を飛ばし、火焰を捲上げつゝ、公園地を抜けて、關外方面に去つた。居住民の慘死者二百七十四名、其の多くは壓死である。町内で最も慘狀を呈した所は、馬車道以北の家で、壓死燒死者多く、どこの家でも一人や二人の死者を出し、道路だけでも三十餘の慘死體があつた。町内の大建物で、青年會館及千代田生命保險會社だけは倒潰を免がれた。六丁目の煉瓦建物であつた指路教會は、全潰の上焼失して、慘死者を出だした。多く死者を出した家を擧ぐれば、五丁目の小田原屋旅館は、三階の大建物であつた爲め、主人杉崎菊次郎、外家族三名、其外雇人三名壓死した。氏は齡既に八十に近く、海宮術の大家で、町内での名望家で、尾上會長として衛生其他公共事業に盡瘁すること二十有餘年、先年、神奈川縣の衛生功勞者として賞状を受けた人である。五丁目の眞川騰寫版店では、三郎夫婦、子供三人に雇人一名とが全滅した。五丁目の仕立職三枝行惠方では、妻及子供五名、外に同居人三名壓焼死して、主人一人だけが助かつた。金田料理店では、女將山田テツ、外女中四人枕を並べて壓死し、四丁目の菓子店弘榮堂では、主人石上留吉及家族二名、外に雇人一名が慘死し、留吉妻だけが生残つた。四丁目正直屋洋品店では、雇人七名慘死した。

一丁目の鶏卵問屋内藤市太郎方では、主人始め家族、雇人五名逃げ場を失つて焼死した。栗原運動具店でも、主人夫妻並に老人の三名が同様に下敷となり、悲鳴を擧げて救ひを求めたが、真砂町方面からの猛火を恐れて、誰とて救護に行く者はなく、今にも焼死せんとする時、尾上町一丁目岡田理之助長男猛夫、外徒弟二名が、生命を投げ出して救助した。一丁目の鳥肉販賣店岡田理三郎氏は、横濱鳥類商同業組合長、及尾上町衛生副組合長であるが、早くも公園に避難して居る町民達を集めて、善後策に就いて協議を開き、此際決して落膽せずに復興に努力しなければならぬと、一同を激励した。震災後救護や復興の事に力を致し、第一縣廳に交渉して、バラック四棟を造つて、避難民を收容し、配給品の分配に努力した。

四 常 盤 町

常盤町一丁目、五丁目は、災前三百二十二戸、人口約一千四百名を有してゐた。大地震襲來と共に、火災は町内二三箇所から起り、尾上町方面からも延焼して、遂に全街は火燄に化した。一丁目乃至三丁目の人達は、主に公園へ、四、五丁目の人達は、主に東横濱驛方面へ避難したが、見當を誤つて、他の方面に走つた人の中には、或は中途にして、或は避難

中に焼死を遂げたのも尠からずあつた。町内では一丁目の生絲商根岸安之助方は、夫婦に子供二人、二丁目の羽二重商仲真一郎方は、夫婦に子供一人、孰れも壓死して、一家全滅の悲運を見た。是等慘死者の数は約百名許で、概して四、五丁目に多かつたが、他町に比較すれば、寧ろ少ない方である。梁や柱に手足を挟まれた儘で焼死したのも多かつた。其の一例を擧げると、四丁目の鳶職花形吉松といふ老人は、鴨居に脚部を壓せられて、身動きが出来ず、孫が之を救ひ出さうと努めてゐる間に、猛火は忽ち後ろに迫つて來たので、吉松は死を覺悟して、無理に叱つて孫を逃がしたといふことである。二丁目なるハイカラ亭事吉川謹一は、一旦飛び出たが、二階に寝かしてあつた嬰兒に心引かれて、半潰れの家にとつて返し、嬰兒を抱へて二階を降る際、第二震で家は全潰して、壓死した。四丁目の履物商北澤圓吉は、後に隣に住む清元の師匠小池ヨネ方の倒潰した家屋から、稽古弟子四名を救ひ出したさうである。

五 住 吉 町

住吉町一丁目から六丁目は、公園前から馬車道を挟んで、大江橋附近に至る電車道添ひの街で、震災前の戸數三百七十五、人口約一千八百であつた。此街には雇人も尠から

すあつた各種の大商店軒を並べ、貿易商、仲買商等多く、五六丁目には、藝妓屋、料理店などがあつて、賑やかなところであつた。家屋約八分通り倒潰し、所々に龜裂を生じ、電車道は到る所彎曲し、一丁目ではレールが一問も高く持上がった所もあつた。早くも町内敷箇所から發火し、常盤町からも延焼して、火は相生町方面に進み、瞬く間に一面の火となり、一戸も剩さず焼失した。罹災した主なる建物は、一丁目では矢崎病院、二丁目では龜井絹物商店、四丁目では八木酒店、五丁目では廣瀬病院、六丁目では朝田回漕店、千登世料理店等である。死者の數は、或は百五六十名位と謂はれ、或は二百名位と謂はれてゐるが、蓋し各家の勤人、雇人等をも合せば、二百人に上ぼつたであらう。一家全滅の家を舉ぐれば、一丁目では、市衛生課員入江市太郎方で夫婦及子女二人、四丁目では、金物商某方で夫婦、老母及弟一人、雇人一人、龜屋玩具店で夫婦及雇人二人、六丁目では、藝妓屋花井方で女將及抱三名、雇人三人等である。全滅ならねど、四丁目豆腐店日下知梅松方では、主人及子供五人死して、妻一人、人生残り、洋傘店某方では、主人、子供二人、親戚の者が二人死して、妻と子供一人とが残された。四丁目新聞賣捌店日之出屋では、配達夫十餘人の死者を出だした。町民は主として公園内に、五六丁目の町民は、大江橋及辨天橋を渡つて、東横濱驛構内へ避難した。一年有半後の復歸戸數約三百である。

六 相 生 町

相生町一丁目から六丁目までの災前戸數三百六、人口約一千五百を有してゐた。街には中流の商家多く、特に大建物とてはない。激震一搖と共に、全街の家屋は唯僅かに一丁目某家の土藏一棟を残したゞけで、全潰或は半潰した。住民の多くは逸早く遁がれ出でて、間近の公園に雪崩れ込んだ。壓死を遂げ或は生埋となつた者も多くあつた。三丁目の料理店八百政方では、女將以下家族、雇人十六名壓死を遂げた。其外一家全滅若くは全滅に近い程度のもの數戸あつた。火元は太田町一丁目角支那料理店、その他三箇所であつた。眞砂町方面から煽りつけた火勢は最も烈しく、忽ち全街悉く焦土と化したのである。一丁目の麵麩店坂本寅次郎氏は、隣家の河合茂吉の妻が、一家五人家の下敷になつたと知らせに來たので、生埋となつてゐた茂吉外四名を救ひ出した。公園に入つた避難者は、震災が靜まると直ぐ公園築山に一部落を作つて、善後策を講じた。一丁目の自轉車商根津酒造藏が、村長格となつて、救護、配給、萬端の事に盡した。同君は早くも九月十二日に、自家の焼跡にバラックを建て、從來の家業を開いて、復興に盡した。町民は夫れゞ復歸し、中には他からも移住して來て、十三年十二月末までには、二百戸

を算するに至つた。

七 太 田 町

太田町は災前の戸數約二百五十、人口約一千であつたが、勤め人も多くあつた。各種の大商店軒を並べ、貿易業者多く、會社、銀行なども亦多かつた。震災では全町建物の約七分通り倒潰した。町内からの發火と、相生町方面からの延焼によつて、全町悉く焼失した。町内の發火箇所は、詳細には判らぬが、罹災の主なる建物は、一丁目、十五銀行、小林貿易店、岩崎家金子家、二丁目、辛酉銀行、日米生絲會社、三丁目、原合名會社、倉庫、關洋服店、四丁目、金森時計店、大川印刷所、五丁目、堀江肥料店、西洋料理、日盛樓、六丁目、は讃岐屋旅館、海老塚給水店等で、其れらの多くは煉瓦造、土藏造の立派な建物であつた。住民の内、一丁目乃至四丁目の者は、主として、横濱公園内へ、五、六丁目の者は、東横濱驛構内へ避難した。町内に於ける死者の數は、關内北部諸街の中では最も多く、其數三百六十九人に及んだ。之は勤め人や雇人も合せた數であるとしても、一戸平均約一人當の死者を出したことゝなるのである。一家全滅若くは其れに近き程度の家を列擧すれば、一丁目、賣藥商、宇田川八太郎方は主人、母及娘三人、足袋仕立職、横山、宇三郎方は主

人、雇人七人、二丁目、羽二重商、松岡武次方は主人以下五人、羽二重商、松田嘉吉方は主人以下五人、四丁目、伊東屋旅館は主婦、子息、雇人及滯留客等計十四人、洋服仕立職、鈴木浪之助方は主人以下三人、雇人一人、葬儀店、渡邊慎吾方は五人、衣服商、土肥憲次郎方は四人、五丁目、按摩業、寺前秀松方は六人、債券商、五古周次方は五人、雇人一人、印刷業、水上政五郎方は四人、水谷政次郎方は三人、肥料商、堀江宗太郎方は主人以下五人、料理店、日盛樓、米山、フタ方は雇人及客五人、通信社、日比野重郎方は社主及社員三人、六丁目は不明である。右の中堀江宗太郎氏は市會議員の公職に在つた。三丁目なる町衛生組合書記、石井梅太郎方は、斯やうな慘劇の眞唯中に住み、當日主人夫婦及子供五人外に居合せの親族二人、使丁一人合せて十人も居たのであつたが、幸に一人の死者もなく、一同無事に避難したので、當町では珍らしい僥倖であると云つてゐる。一年有半後の戸數百八十八、其の約四分の一は新來の家である。

八 辨 天 通

關内の中樞で、各種の貿易商店、雜貨店軒を並べ、何れの店頭も外人が賞美する邦産美術品を飾つてゐた。辨天通一丁目から六丁目までの戸數人口は、災前戸數百六十六、居

住者一千五人あつた。此邊は永い間火災に遭はなかつたので、老舗舊家などが多く、大抵は土藏造であつて、商品什具を多く貯へてゐた。又會社銀行等も亦尠からずあつた。大震の突發するや、住家商店の多くは一堪まりもなく全潰し、土藏は塗り土を振落された。倒潰しなかつたのは川崎貯蓄銀行支店、正金銀行、原合名會社及小野商店の倉庫等であつた。但し此邊り地面に龜裂が比較的少なかつたのは、昔の洲干半島の地内で、埋立地が少かつたからであらう。此の界限の發火で最も早かつたのは、北西隣なる太田町四丁目及同町一丁目、一三丁目が眞先きに其の火先を受けて焼拂はれ、尋いで五六丁目が其の方面よりの火先を受けて一砒めにされた。類焼した建物の主なるものは、一丁目では第三銀行、小野生絲店、山岡毛皮店、山本絹物店、二丁目では共益不動株式會社、木村生絲店、大和絹物店、三丁目では原合名會社、鹿島屋旅館、河北時計店、日米生絲株式會社、四丁目では信濃屋洋品店、大正生絲合資會社、共同火災保險會社支店、大平生命保險會社支店、日比谷棉花店、五丁目では長野屋旅館、六丁目では、植勝運送店內國通運會社支店、青木氏邸等で、凡らゆる財貨、凡らゆる帳簿書類等をば烏有に歸した。居住者の死者は二百三十餘名、其の外通勤者の遭難も尠くなかつた。在店中の内外のお客や、通行人の死傷者も多數あつた。死者を多く出した家は、一丁目では絹物商鈴木彌次平主人夫妻

雇人二名で、子息一名助かつた。雜貨商宮崎萬福主人及弟二名、外に來店中の外國人五名、小野生絲店で店員六名、二丁目では煙草店石原玉三郎主人夫妻以下四名、三丁目では原合名會社で店員雇人二十二名、鹿島屋旅館で夫妻二人雇人一名、子息助、四丁目では靴商三川信太郎主人、子女二名、内後助、足袋店福田俊三主人夫妻其他家族四名雇人一名、一家繪、草紙店池田幸吉主人夫妻及子息四名、全、酒店鈴木宗作主人夫妻及子女二名雇人一名、全、賣藥店石川伊之助夫妻、減全、洋品店本多建三妻子女三名雇人一名、主人助、漆器商吉川信次郎妻子女四名雇人一名、主人助、大正生絲合資會社で社主小川久清夫妻子女四名雇人三名、減全、五丁目では羽二重商谷田金之助夫妻女二名、長男は他行して、てゐて助かる、靴店中村和賀夫妻子女二名雇人一名、減全、等である。町民中、一、二、三丁目の人々は、主として公園地に、四、五丁目の人々は、主として萬國橋を渡つて、海岸及船舶に、五、六丁目の人々は、近きは河川、遠きは水道山方面に避難して、多くは無事であつた。河川に赴いた者の中には、避難中慘死した者もあり、殊に四、五丁目の人々で、正金銀行に避難したものの中には、焼死體となつたものもあつた。而し同銀行地下室に最後まで堪へた者は多數助つた。災後諸所に流寓した町民達も、漸次に復歸し來り、過半は從來の家業に従事して、復興の事に餘念なく、十三年末の調査に據れば、戸數百四十二、人口六百六で、人口の著しく減じたのは、遭難者の多かつ

た結果である。

八八

九 南 仲 通

南仲通一丁目から五丁目は、震災前戸數百二十八戸、人口五百七十三を有し、貿易商と仲買業の店が軒を並べて、商取引の活潑な土地柄である。大震起ると同時に、開港紀念會館、正金銀行、川崎銀行等數棟を残したのみで、建物は、大抵倒潰した。倒潰の勢ひ烈しかったのは、三丁目の大濱氏邸の表圍ひの高さ七尺、長さ十間の煉瓦塀が一瞬の間に倒れた。横濱記念會館の塔が倒れなかつたは、實に不思議であつた。間もなく太田町三、四丁目方面から、黒煙が立ち上り、當町に延焼した。二丁目の興信銀行の裏手からも、横濱毎朝社の裏手からも、火炎上り、南風に煽られて、海岸方面に延焼し、忽ち同町内を焼きつくした。焼失した主なる建物は、左右田銀行、加藤羽二重商店、横濱記念會館、興信銀行、西村、加藤兩商店、大濱商店、横濱取引所、岩國屋旅館、江戸幸鰻や東京火災保險會社支店、正金銀行等である。

又この町で勤め人として來てゐた者の中で、死んだ者が可成りあつた。神奈川、石川市會議員もこゝで遭難した。哀話を残した家は、二丁目仲買商諸星嘉七氏一家で、長い

間床に就いてゐた父嘉七氏を、子息の定三氏が脊負ひ、母や妻女や娘と、店員二名を連れて漸く逃れ出て、縣廳まで辿り着き、取敢へず湯呑所で一息ついてゐると、突然餘震が起つて、同所は忽ち倒潰し、折角逃がれた七名は、皆下敷になつて、そのまゝ即死し、或は焼死し、生き残つたのは、次男保三氏と、本牧にゐた家族二名だけであつた。岩國屋旅館は、家人と、宿泊者六名死亡し、四名の負傷者を出した。横濱毎朝新報社では、女工六名席を並べて壓死した。江戸幸鰻屋では、店主益本幸次郎、外家族、雇人全部壓死した。印刷業、南仲社では、社主薮覺次郎氏の外職工二十一名が慘死した。福久料理店では、雇人四名、北脇仲買店では、雇人四名、慘死し、寺田理髮店では、主人芳次郎、始め家族三名壓死した。五丁目では、東京海上火災保險會社の倒潰で、社員九名、慘死した。町民の大部分は、公園に避難し、五丁目の者は、海岸方面、横濱驛構内などへ避難した。中には、正金銀行に逃げた者もあつたが、中へ入ることの出來た者は、助つたが、石塀内へ入つたり、表門に彷徨つてゐた人達は、皆焼死した。

正金銀行は、花崗石造りで、耐震耐火の建物であつたので、大地震は、なんのこともなく、現金、有價證券、その他重要書類は、地下室の大倉庫内に入れ、無事保管することが出來た。同銀行こそ唯一の避難所であると考へた町民等百餘名は、南仲通りの表門と、辨天通り

の裏門とから續々と入つて來た。人数は行員と合せ三百名ゐた。而し間もなく猛火が四方から襲つて來たので、銀行は表と裏の門を閉めて、一同は辨天通り方にある地下室へ入つて、運を天に任せてゐた。猛火は遂に硝子窓と硝子天井とを熔かして内部を襲ひ、内部の木造の部分を全部焼き盡した。地下室に在りし三百人は、四方を火に巻かれながら、いまにも窒息するほど苦しんだが、行員の中に機轉の利く者があつて、換氣法などをやつてゐる間に、午後四時頃火も鎮まつたので、辨天通り裏門を開いて、一同を内から出した。彼等は焼け灰の上を踏み越えて、東横濱驛の廣場に出て、思ひ／＼の場所に去つた。尙氣の毒であつたのは、午後一時表門を閉めた後へ、火に追はれ／＼正門及南仲通側の石堀の内に入つた人々は百餘名で、全部黒焼死體となつて、重なり合つてゐる様、如何にも無慘であつた。

一〇本町

本町通りは横濱市の中心地で、一丁目から六丁目の大通りは、北は辨天橋から、南は長く山下町に續いてゐる。各種の會社、銀行、輸出商店、回漕店、雜貨店等、洋風の建物が並び立つてゐた。震災前は戸數百五十五、人口約九百五十、他町からの通勤者が數百名あ

つた。激震と共に全街建物は約八割倒潰した。縣廳、横濱郵便局、生絲検査所、安田銀行支店、サムライ商會、田中岡野兩商店、清水回漕店、第二銀行、若尾商店、第百銀行支店、横濱貿易新報社、横濱小學校、本町小學校等で、多く洋風の二三階建物である。

間もなく五丁目邊より火を發し、續いて相生町、太田町からの火先を受けて、全町は忽ち火に包まれてしまつた。土地柄だけに損害は大きく、生絲貿易品等の損害額は巨額のものであつた。

町民慘死者の數は二百四十七人で、この外に通勤者や、通行人等の死者が多くあつた。多くは壓死であるが、下敷になつて生きながら焼死した者もあつた。一家全滅同様の家は、先づ上州屋旅館で、主人家族、雇人等で十一名死亡し、女兒一名だけが助かつた。大勢屋旅館では、主人家族、雇人等八名死亡して、男兒が一名生き残つた。松井旅館では、家族、雇人等九名死亡して、主人一人だけが残つた。この他一家十名内外死んだものが二三ある。横濱小學校では、校外で犠牲になつた兒童が九十三名あつた。本町小學校でも、同様の兒童が八十四名あつた。

町民の主なる者は大抵は横濱公園に逃げ、五六丁目邊の者は、辨天橋を渡つて、東横濱驛構内に避難し、或は伊勢山、掃部山、遠くは水道山方面に逃げた者もあつた。或る者は

海岸方面に逃げて、船舶に收容された者もあつた。震災後數箇月間町民の多くは、市場末に一時假屋を建て、辛苦を嘗めつゝ、再び歸る爲めに復興を待つてゐた。一丁目方面が復興の氣運に向つて、物資の運搬に必要な上、運送店、回漕店等が眞先に開業したので、急に活氣を添へた。斯くて大正十三年の末には、戸數は百八、人口は五百三十となつた。震災後生絲市場は十數日で復活した。

一一 北 仲 通

北仲通は一丁目から四丁目、五丁目は全部横濱地方區裁判所の構内に屬し、六丁目は航路標識管理所絹業試験所羽二重検査所等が占めてゐる。各種の會社商店が軒を並べてゐた。従つて住民は少ないが、勤め人や雇人は多かつた。町内の民家や役所は、約八分通り倒潰し、多數の死者を出した。火はやがて四丁目附近、其の他より發し、一戸も残さず焼き盡した。焼失の主なる建物は、開通社、加藤商店、サムライ商會、女子青年會、寄宿舎、紀之國屋旅館等であつた。

町内の死者は、勤め人も交つてゐるので、判然とは分らないが、二百名を越してゐることとは確かである。裁判所は百餘名死者があつた。一家全滅、全滅に近い家を擧げると、多くは三丁目、鯉淵牧之助方では、夫婦外に子供三名、減全鶴田甚平方は夫婦と子供五名、減全度量衡製造業荒井留吉方は夫婦と子供四名、減全山陪吉方は夫婦と女の子二名、孫一名、減全解業齋藤若藏方は妻子供三名、減全畫家日置政吉方は妻子供二人等である。町の衛生組合長富豪大西源太郎氏も慘死した。

町民の多くは公園に避難したが、中には萬國橋を渡つて、新港方面に行き、繫留中の船舶に救助されたものもあつた。東横濱驛に避難したものもある。同町は震災後復興も早く、裁判所跡に、大規模の設計の下に、生絲検査所が新築されることになつて著手された。

一二 元 濱 町

元濱町一丁目から四丁目には、各種の會社、商店等がある所であるから、大きな建物が多く、勤め人や雇人が多い。大地震が襲來すると同時に、町内の建物は八分通り倒潰した。間もなく火が發して、石川組の建物を除く外、他の建物は全部焼失した。その主なる建物は、渡邊銀行、石川回漕店、三井倉庫、共同運輸會社等、其の他大商店、旅館などであつた。岩上合名會社の倒潰は殊に激しく、三階の建物は眞中頃から破壊し、四方に碎け

落ちたので、家屋を押し潰し、社員其の他の死傷者を多数出した。社主岩上幸太郎氏も
 壓死した。

町内の死者の数は約百名であつた。一家全滅は、三丁目の菓子商内田金次郎方で、夫
 婦と女兒一人、二丁目の本重貿易會社で居合せた者約十人、四丁目の酒井回漕店で、主人
 源太郎夫婦と母親子供との四人、安達三郎方で三人、安達善藏方で五人、齋藤某方で四名
 等である。

一三 海岸通

海岸通り一丁目より五丁目は、會社商店のある所で、建物は概して大きい。税關の一
 部もこの町にある。激震が起ると同時に、建物は大部分倒潰したので、多数の死者を出
 した。更に隣町から延焼して來た火に、悉く焼失し、一層死者を増した。

罹災した主なる建物は、日本郵船會社支店、税關一部、神奈川縣港務部、神奈川縣測候所、
 商品倉庫、山形松永等の回漕店、三井倉庫等である。一家全滅、若くは全滅に近い家は、四
 丁目の船業兒玉某方で、夫婦子供二人、老婆同居人二人、五丁目では本間セキ方で、家族
 三人、雇人二人、田島某方で三人等であつた。

一四 境町

境町一・二丁目は、震災前戸數五十三、人口約三百を有し、金物營業者多く、醫師も割合に
 多かつた。家屋は悉く倒潰して、八十七名の死者を出した。その主なるものは一丁目
 の横濱運送株式會社の雇人八名、印字機械商平工五郎方では主人以下家族三名、減全二丁
 目の西村貿易店では店員五名、中根家禽店で家族四名等である。二丁目の原田洋食店
 では、主人夫婦慘死したが、子供二人は外へ遊びに出てゐたので助つた。同店は開業後
 五日間で、災難に遭つたのである。

同町は公園より外には、逃げ場はなかつたので、町民は先を争つて公園に走つた。避
 難者等は不安の中に數日を暮したが、やがて、衣食物が配給されるやうになつたので、漸
 く安心することが出來た。住民の大部分は長らく、公園内のバラックに籠つて、慘めな
 生活をしてゐたが、その半數の者は、焼跡に歸つて家業を始め、半數は他の町に移つてし
 まつた。山手方面から、新たに移つて來た者二十餘戸あつた。

第二項 港 内

九六

激震が起ると同時に、西波止場にある遞信省海事部横濱出張所、横濱税關旅具検査所、同監視部大棧橋、水上警察署等の建物は、全潰或は半潰した。やがて海岸通方面から起つた火炎は、折柄の烈風に煽られて、縣測候所、縣港務部水上警察署を一舐めにして、波止場一面に擴がり、棧橋の上屋をも焼失した。

當日は棧橋の右側には米汽船エンプレス、オプオーストリア號と、左側にはアンドルボン號が繫留されてゐた。エンプレスは正午キャナダに向つて出帆する豫定であつたので、棧橋は内外の見送人その他、ポーターや行商人で、千人近くの人出であつた。エンプレス、オーストリア號が出帆しやうとして、錨を上げかけた時、突如として起つた恐ろしい激震は、棧橋を破壊した。陸地に續いた部分數十間は、水煙りを擧げて、海中に墜落し、陸地との連絡は全く切斷された。棧橋の上にある人々は、水中に振り落されて、危く溺死しやうとしたが、本船はいふまでもなく、同船の準備に附近にゐた汽艇や、其の他碇泊中の船が、直に救助に努めたので、大抵は救はれたが、中には溺死した者もあつた。救助された者は、棧橋に上げられて一時は喜んで見たが、陸へ行くことは出来なかつた。

ので、當惑してゐる間に、突然、棧橋上屋が燃え始めたので、人々は絶體絶命に陥つた。これを見てアンドルボン號は、直に梯子をおろして、救助したが、焼死した者、溺死した者は數十名あつた。

當日港内には、大小百餘の汽船が碇泊してゐた。東洋汽船のコレヤ丸は、税關第四號岸壁に繫留され、二日に出帆する準備をしてゐた最中に、突然岸壁が崩れたので、その隋力で、同船は數十間先きに突き出された。その際岩壁にゐた船舶關係者、荷役人夫が數十名海の中へ落ちたので、本船は直に救助した。火はやがて、同所の三號上屋から發して、忽ち四邊は火に包まれてしまつた。コレヤ丸は火の粉を盛んに浴びるので、已むなく港内第三區に立退き、引續き汽艇を使用して、避難者を救助し、數百名を收容した。

第五號岩壁には、大阪商船のロンドン丸が碇泊し、第六號岩壁には、バリー丸が碇泊してゐたので、同じく汽艇を用ひ、萬國橋方面から避難して來た多數の者を救助した。西波止場港灣内及同所から新波止場を経て、辨天川筋の海面には、碇泊中の小形汽船や、舢板などが澤山あつた。突然沿岸一帯の火が、それ等の船舶に襲つて來たので、擧つてその場から安全な水域に立ち退かうとしたが、四邊は狭く、その上船舶は密集してゐたので、どうすることも出来ず、その家族達は船を捨て、漸く大船に避難したけれども、逃げ

場を失つて焼死し、溺死した者は約五十名あつた。岸壁は總延長約千百間であるが、被害のなかつた所は、僅に二百三十三間で、その他は殆んど海中に落ち込んでしまつた。

防波堤は東堤と、北堤の二つに分れてゐるが、兩堤とも數百間沈下し、白赤燈臺は見えずなくなつてしまつた。北堤上にあつた石造の港務部見張所は破壊してしまつた。

港内に於ける船舶の損害は、大正十三年二月二十日までの調査に據ると、小蒸汽船四十隻、發動機船五十隻、解船九百八十四隻、その他二百三十八隻で、船體損害見積り總額は、三百四十一萬三千八百五十六圓である。積載貨物損害見積金は四百五十二萬百三圓に達した。

港内設備の被害が大きかつた爲め、震災後は暫くの間船舶の發着が不可能となつたので、各方面から輸送して來る罹災民の救護物資は、一時新山下町の埋立地に陸上げされてゐたが、應急工事をされた棧橋は、九月十九日には早くも巨船を横付け出来る運びとなつて、年内の船舶は發着共に略々支障がないやうになつた。工事は間もなく一千三百萬圓の巨費を投じて著手した。

第三項 關内東南部(山下町)

山下町は開港以來の外人居留地で、市の中心地といふべき繁榮の町であつた。外國商館、商店會社、銀行、ホテル等いふまでもなく、總て洋館ばかりで、街には、婦人洋服店、貴金屬、寶石店、珍らしい日本の骨董品や、種々の美しい美術品を飾つてゐた店などが、人眼を惹きつけてゐた。往來する人は殆んど外人ばかりで、ホテルに泊つてゐる觀光の外人に取つて、唯一のお土産買ひ場所であつた。震災と同時に、この華やかな山下町の居留地は、傷ましい廢墟の地となつてしまつたのである。

上下動の激震突如襲來するや、煉瓦造りや石造の舊式の建物は、見る／＼一齊に倒潰した。この町一帯は埋立地が多いので、地盤が極めて弱かつたから、一層倒潰を早めたのであらう。建物の内にゐた人はもとより、通行人でも、殆んど逃げる暇はなく、破壊した建物の下敷となつて、壓死したのであつて、一建物で十名、二十名、數十名といふ多數の死者を出したのであつた。殊に建物が大きかつたので、道路は埋められてしまつて、辛うじて飛び出した人も、逃げることも出来ないで、生き埋めになつた人達と同様に、間もなく襲つて來た火に焼死を遂げたのである。

建物が倒潰してから約二十分の後、二百番館、二百四十番館、二百五十九番館等の邊りから、火は交々發して、關内方面から延焼して來た火と合し、折柄西南の強風に煽られて

海岸方面に火勢を逞うし、瞬く間に四邊を火の海と化した。地震では無事に逃げた人も、濛々たる黒煙が眼の前を遮つて、行く道さへ判らなかつた。あちこちと彷徨つて道を捜す間に、猛火に包まれて、焼死した者は、尠なからずあつた。二百番館邊りの發火は、市内で一番早く、數名の消防署員が駆けつけたが、水道は既に破裂してゐるのを見て、手の附けやうもなく、そのまま引揚げたのであつた。斯くて猛火は、街を縦横自在に焼き盡し、午後七時頃には吉濱橋の東南方面から大旋風が起つた。八時頃になつて漸く鎮火した。餘燼は數日間も燻ぶつてゐた。

三井物産株式會社支店の倉庫は、建築物が極めて堅牢であつた爲め、倒潰を免かれ、直に扉を閉じたので内部には少しの損害もなかつた。露亞銀行の倉庫は、同じく火災を免れたので、保管中の生絲は、後日生絲市場が復活した時、多大の便宜があつた。

露亞銀行岩井ビルディング中央電話局米國領事館別館等、その他耐震建物は倒潰はしなかつたけれど、猛火には遂に堪へられなかつた。同町は會社、商館等が多いので、遭難者が他の町々のやうに町内の住民ではなく、勤め人が多かつたとのことである。當日は土曜日で、事務員や雇人は大抵歸らうとする頃であつた。若し地震がもう少し遅かつたなら、死者は必ずもつと少なくて済んだであらう。

倒潰して焼失した建物は、次の如きものである。日本の建物としては、中央電話局、加賀町警察署、大阪商船會社支店、東洋汽船會社支店等である。外國の建物としては、スタンダード石油會社露亞銀行セールフレザー會社、香港上海銀行、チャータード銀行、獨亞銀行、中法實業銀行、グランドホテル、オリエンタルパレスホテル、マイソネットホテル、イースタンホテル、米支英露佛獨の各總領事館、瑞西葡蘭伊丁西瑞典、チエックスロバキヤ、諸秘希、白亞、巴芬、ベネジエラ、ポリグイヤ等の各領事館、英米加奈陀佛の各商務館、米船舶院、支那學校の大同學校、中華學校、華僑學校、外人商業會議所、ドッドウエルビルディング、サミユールビルディング、ベネラルシルクビルディング、ユナイテッドクラブ、三江公所、インタナショナルビルディング、中華會館、關羽廟、外國商館では、英一番館を始め、英國商館百五十一、内十八は、支那商館百三十六、米國商館五十四。その總數は四百三十三である。

英國總領事館の庭内の名樹玉楠も焼失したが、根は焼けなかつたので、再び新しい枝葉を出した。ペルリが來朝した時、幕府の役人が玉楠の傍の假舎で應接したといふこと、で有名になつてゐる。

同町を流れてゐる堀川と、大岡川に沿ふ道路には、大小の龜裂を生じた。橋も悉く破壊或は焼け落ちて、避難者の困難は一通りではなかつた。谷戸橋は破壊し、前田橋、西ノ

橋は焼失した。大岡川では吉濱橋は陥落し、花園橋は焼失した。河中の至る所に惨死體は漂ひ、黒死體を乗せた焼船が散亂してゐた。

山下町で最も酸鼻を極めたのは、街の中央部から西部一帯を占めてゐる南京街であつた。同町は支那人の居留地で、狭い街には幾つとなく横丁があつて、そこに南京料理の店や、雜貨店や、藤椅子屋や、洋服屋などが景氣よく軒を並べて、その間に日本人のやつてゐる酒屋や、魚屋もあつた。兎に角、横濱で人氣を寄せる唯一の街であつた。建物の多くは古い脆弱な煉瓦造りで、軒先が突き合ふほど密集してゐた。全町の建物は第一震で、目茶々に粉碎されてしまつた。續いて火炎は八方から起つたので、逃げる餘裕もなく、約五千人の支那人中二千人の惨死者を出した。

海岸通にあつたグランドホテルと、オリエンタルホテルの被害も、亦酸鼻を極めたものであつた。兩ホテルは、何れも煉瓦造りの大建物で、見晴しのよいところであつた。兩ホテルでは常に夜會、舞踊會が開かれ、在留外人の楽しい遊び場であつた。當日は丁度午餐時であつたが、大地震が襲ひ來ると同時に、二ホテルは瞬く間に崩壊した。宿泊中の外人や、午餐に來てゐたお客や、事務員ボーイ等は過半数建物の下敷となつた。入口や階上にゐた人々は、逸早く飛び出し、又は辛うじて匍ひ出したが、奥間にゐた者や、地

下室に居た者などは何うしても助くることが出来なかつた。早くも襲つて來た火に、さうした人々は皆焼死した。グランドホテルでは約九十名の死者を出し、オリエンタルホテルでは約五十名を出した。

當日グランドホテルには、歐米人八十名、主として米人が宿泊してゐたが、この中の約二十名は、當日正午出帆のエンプレス・オブ・オーストラリヤの船客を見送に行つたので、それ等の半分は遭難し、半分は助かつたやうである。室内に居た同ホテルの社長マクドナルド氏が焼死したことは、震災後、發掘をした時、白骨に附いてゐた時計と、鍵とに依つて、漸く確められた。尙、同ホテルの役員、事務員、使用人等二百四十名の中、死者は五十一名であつた。五番館のクラブホテルでも多数の死者を出した。

その他一建物で、多数の死者を出した所を挙げると、百六十四番ビドリイ商會では店員並びに雇人二十三名、九十六番のサンダルトン商會では二十七名、五番東洋汽船會社では三十一人、百四番福音印刷所では七十五名、横濱郵便局本局では九十名、郵便局電信料金課では三十名、二百十番菅川屑絲商店では三十一名、百七十七番三井物産會社支店では二十三名等であつた。

九十五番館の某輸入商會は、倒潰を免かれたので、附近の町民は此處こそ屈強の避

難場所と思つて、四十餘名も逃げ込んだが、忽ち猛火に包まれて、悉く焼死した。尙海岸通には、内外人の死體が七十餘り折重つてゐた。米國領事は無殘にも縣廳前で慘死された。

當町には勤人が非常に多かつたので、住民の死者の數、勤人の死者の數と、分けて調べることが出来ない。山下町元町關内の一圓を管理をしてゐる加賀町警察署の調査に據れば、管内總ての死者四千八百九十人であるといふから、その約半二千四百名は山下町の死者であつたと見てよい。

同町に於て、一家全滅の悲運に遭つた家を擧げると、次の如くである。百三十七番地表具商、杉本藤三郎方では、夫婦及び養子夫婦、孫二人、雇人一人、絲商中村秋三郎方では、夫婦及び子供二人、同八十七番薪炭商新倉庄方では、夫婦、同牛乳商藤東吉方では、夫婦、百二十三番安藤某方では、夫婦及び子息二人、百八十八番自轉車店海老原環次方では、夫婦及び子供五人、雇人一名、同硝子商店谷田貝久春方では、夫婦及娘三人、雇人二名、同鋳方商金子龜三方では、龜三並に母及雇人一名、同家具商山口祥方では、夫婦、百八十七番家具商中西藤吉方では、夫婦及び娘二人、百三十四番酒商小島一作方では、夫婦及び娘一人、雇人一名、百三十七番靴商中村貞治方では、夫婦と小兒一名、同錠前職木村富次郎方では、夫婦母

と子供一名、百三十四番酒商小島逸作方では、夫婦、百八十九番家具商藤田四郎兵衛方では、夫婦と子供二人、何れも慘死したのであつた。

生命から、漸く逃出した町民や、勤人等、幾萬の人々は、主として海岸、同埋立地、及横濱公園などへ避難した。港内に碇泊中の船舶に收容された内外人は、尠くなかつた。避難者の中、勤人は各自の宅へ歸つたが、家族の安否が判らないで、悲境に陥る者が多數あつた。

震災後、同町の人々は、各地へ思ひ／＼に散りて、復興の日を待つてゐた。外人の多くは市の救護を受けたり、各本國の救護團の保護を受けて、多くは阪神地方に赴き、中には歸國した者もあつた。支那人も歸國したが、幾分は歸つて來て、南京街は稍、復興し、元の料理店などが出來てゐる。京濱間に残つてゐる僅かな外人達は、罹災しなかつた同國人を頼つて寄寓した。罹災した外國領事の中で、英米二國だけは直に碇泊中の艦船の中に假事務所を置いた。山下町の建物は、煉瓦石材などで建てた大きなものであつたので、燒跡の整理が非常に困難な爲めに、他の諸街よりは非常に遅れた。その上に、外人が僅かしか歸つて來ないので、復興しないのである。ホテルなども容易に復興しない。グランドホテルなどは、全然再築をやらないといふことである。併し山下町には、レン

トホテルといふハイカラなホテルが、フランス人の手で建てられた。日本の大震災記念ホテルだと、米人の間に評判されて、泊り客も多い。

第三節 釣鐘新田南部及西部

南吉田町と、その以東に在る十五箇町を一區劃として、その被害を記述する。

この地域は、最も新しい埋立地で、吉濱、松影、壽扇、翁不老、萬代の埋地、七箇町と、日の出川を渡つて向ふの長者、富士見、山吹、真金、永樂、山田、千歳、三吉の八箇町と、南吉田町の一帯とで、一區劃をなしてゐる。中央は商業地で、その賑さは伊勢佐木町界隈に肩を並べてゐる。釣鐘新田の大部分は、去る大正八年四月火災に遭つて、其の後道路等も擴張され、店舗なども工夫された新しいものが立ち、一層好い街となつた。

斯くの如く同地域は新しい埋立地で、地盤が極めて脆弱であつたから、第一震が襲ふと同時に、家屋の大半は一堪まりもなく倒潰した。水道鐵管の破裂と、地面の龜裂との爲めに、山吹、富士見、山田、千歳、三吉、永樂、真金町、各町に水が氾濫して、忽ち四邊は泥海となつた。町民はこの出来事に狼狽してゐるところへ、數十箇所から殆んど一齊に發火し、折柄の烈風に、火勢を強めて、火は見る／＼一面に擴がり、この地域から伊勢佐木町界

隈にまで續いて燃えて行つた。當時全市火の海と化してゐた。

南吉田町の南川外の小一部分を残して、全地域は一戸も残らず焼失し、關内、關外まで見渡す限り焦土と化したのである。龜裂は殊に甚しく、各川筋の沿岸には道路の幅五分の一、或は三分の二の大地割を生じた。道路面は川向きに傾き、又は陥没し、川岸は殆んど總崩れとなつた。電車線路の敷石は跳ね飛ばされ、レールは飴の如くに曲つてしまつた。この地域には川が多いので、橋も三十餘箇所あつたが、大岡川筋の東では、焼失した橋は、港橋、花園橋、吉濱橋は一部破壊、新吉田川筋では千歳橋破壊、日本橋破壊、横濱橋一部破壊、長島橋焼失、武藏橋焼失、山吹橋半焼、千秋橋焼失、鶴ノ橋一部破壊、權三橋焼失、蓬萊橋焼失、池下橋筋では、共進橋焼失、日枝橋一部破壊、其他焼失破壊した橋は枚擧するに暇あらずである。

此の地域として、安全な避難地は、中村町の丘であつたが、そこへ行くには、車橋を除く外、何れも破壊してゐるので、避難するに大障害を來した。しかし大部分の人は、斯る窮狀に陥らない先に逃げたのであつたけれど、家族を助けやうとしたり、或は荷物を持ち出さうとして逃げ遅れた人達は、逃げ道を失つて、焼死したのである。しかし、危険を冒して黒煙の中を逃げ、川を泳いで向ふ河岸に渡つて助つた者はある。中には岸の崩れ

に身を隠して、水を頭からかぶつて熱氣に堪へ、辛うじて助つた者もある。しかし、老幼婦女等は何うすることも出来ず、川の中へ落ち溺死した者が澤山あつた。南吉田町の第三小學校の校庭には數十名の焼死體があり、吉濱町の石炭置場には約百名の焼死體が重なり合つてゐた。

一方横濱公園方面に逃げた者も、吉濱花園港の三橋が、何れも破壊してゐたので、公園に行く道は全く絶え、猛火に追はれ、川中へ身を浸して、辛うじて助かつた者もあつたが、溺死したものが多かつた。

南吉田町の住民は、近くの堀内町や、南太田町の罹災を免かれた所へ避難した。横濱遊廓に多数の死者を出したことは、建物が大きいことであつたこと、逃げ場がなかつた爲めである。

本地域の中程にある日之出川以西の數箇町は、震災後久しく水道が出なかつたので、他町より復興が遅れた。

一 吉 濱 町

吉濱町は、大岡川と中村川とに挟まれてゐる三角形の町で、震災前は戸數三百餘戸、そ

の多くは商店であつた。大地震起るや、忽ち全家屋の八分通りは倒潰した。火は松影町から延焼して、一戸も残さず焼失してしまつた。罹災の主なる建物は、日本海員掖濟會の事務所、寄宿舎、海員養成所、病院、逕信省材料倉庫等である。

掖濟會の裏手には、千三百坪許りの空地があつたが、去る大正八年に此の邊に大火があつた時、この空地が唯一の避難場所になつたことを、同町民は思ひ出して逃げて來た。隣接の各町からも、逃げて來た者もあつたから、その數は二百餘名もあつたらう。而し間もなく、火が松影町方面から來るやうなので、避難者中それを見た人々は、他方面に逃げた。正しく三時頃になつて、火は忽ち掖濟會及逕信省倉庫に燃え移り、積置きの石炭にも、火が移つたので、持ち込んだ荷物を惜んで、こゝを離れなかつた數十名の人は、遂に無慘な焼死を遂げたのである。

町民の多くは、吉濱橋を渡つて公園に逃げ、或は龜ノ橋を渡つて、中村町の丘に逃げたのであつて、それ等は皆無事であつた。町内の死者は約百名であつた。同町での悲惨な家は、衛生組合事務員上條金作夫妻、酒店安西喜一方は夫婦老母、豆腐屋安藤力藏方は、力藏と子供三人、船夫齋藤平吉方では夫婦と子供三人、箱商原嘉平方では老母妻と子供三人、船夫鈴木磯太郎方では妻と子供三人、これ等が何れも慘死を遂げたのである。震

災後同町の戸数は二百五十戸となった。

二 松 影 町

松影町は、戸数七百七十五で、表通には商店があるけれども、其の他は主として勤め人の住居が多い。地盤が比較的強いので、家屋の倒潰は全家屋の半数であつた。けれど、三十分後に發火し、隣接の諸町からも延焼して来て、一戸も残らず焼失した。罹災した主な建物は、龜ノ橋病院、五丁目の製氷株式會社等であつた。死者は五六十人を出したが、その過半数は、山下町の會社・商店に勤めてゐた人である。多く死者を出した家は、コック佐々木榮藏方では、榮藏と子供三人、運轉手藤太郎方では、藤太郎と子供二人、七寶燒業平井平作方では、子供三人、船夫阿部熊吉方では、妻と子供二人等である。

三 壽 町

壽町一丁目から四丁目は、埋立地の真中にあつて、四百六十戸を有してゐた。多くは、商店で、住宅は少なかつた。地震では、全家屋の七分通りが倒潰した。程なく零時十分、四丁目から發火し、松影町から火を受けて、家屋は悉く焼失した。罹災した主なる建物

は、相模屋呉服店、左右田銀行支店、バプチスト教會等である。死者は六十八名で、この中で相模呉服店だけの死者は十名であつた。一丁目の經師職長八方では、長八と妻、子供一人、徒弟一人が壓死した。町民の多くは、中村町の丘地や、横濱公園等に避難した。一年有半後、戸数は約三百戸となつた。

四 扇 町

扇町一丁目から五丁目の戸数は、四百六十戸であつた。家屋は總て新らしかつたので、倒潰は約五分通りで、比較的多くはなかつた。大岡川と日之出川沿ひの道路には龜裂を生じた。

午後一時頃、町内二丁目と、四丁目からと發火し、四時頃までに、悉く焼失した。花園橋は焼失したが、扇橋が焼失を免かれたのは、避難者に取つて幸ひのことであつた。焼失した建物は、壽警察署と名取ホテルとであつたが、ホテルでは、止宿中の外人三名と、雇人數名が壓死した。死者を多く出した家は、一丁目の硝子商神田某方で、老母妻と子供二人、二丁目倉庫業小林忠七方では、忠七と妻、子供三人、小賣商永島政吉方で、老母妻と子供二人であつた。一年有半後、復舊した家屋は三百七十戸である。

五 翁 町

翁町一丁目から五丁目の戸数は、震災前は三百戸であつた。多くは商店であるが、住宅も相當に多くあつた。大地震が襲つて來たと同時に、全戸数の約八分は倒潰はしたが、同町からは發火しなかつた。けれど隣町から延焼して、家屋は悉く焼失した。罹災の主なる建物は、辛酉銀行支店と、市營住宅の文化莊等であつた。四丁目の壽小學校は、鐵筋コンクリートの建物だけに、少しの被害を受けたゞけであつた。

死者は五十七名を出した。多く死者を出した家は、一丁目の鹽問屋平沼磯五郎方で、妻と、子一人、義妹下婢一人、三丁目の塗物商太田芳太郎方では、弟と、子供三人、左官職畑井平次郎方では、夫婦と子供二人であつた。尙、三箇月前に新築した大建物の文化莊の中には、約九十の家庭があつたのである。十全醫院事務長横田芳次郎氏は、其一戸を借りてゐたが、同所が倒潰した時、同氏妻、子供二人は壓死した。其他にも死傷者を出した。同町は一年後、戸數二百戸となつた。

六 不 老 町

震災前不老町は、戸數二百五十戸を有してゐた。大地震では、全家屋の八分通り倒潰した。火は扇町方面から延焼して來て、三時間の間に町内を焼き盡した。主なる建物は、安田銀行支店である。

死者は八十五名で、家で多く死者を出した家は、一丁目の魚問屋田口太郎方で、妻及び子供四人、二丁目産婆山内ツタ方では、ツタと、子供一人、助手三人被全であつた。町民の多くは、港橋の焼ける前に公園に逃げた。同町は一年半後、戸數三百四十八となつた。

七 萬 代 町

萬代町一・二・三丁目は、埋立地の北にあつて、吉田大岡、日之出の三つの川に圍まれてゐる。戸數は百十戸であつた。吉田川河岸には倉庫が多い。震災では建物八分通り倒潰した。川岸通りには、あつちこちに地割を生じた。

午後一時半頃、二丁目から發火したばかりでなく、隣町から延焼して來たので、瞬く間に焼失した。樺三橋も、蓬萊橋も焼け落ちたが、鶴ノ橋だけは残つた。午後五時には、三丁目に大旋風が起つて、焼トマンなどが空中に捲き上げられた。罹災の主なるものは、銅鐵器合資會社、高原冷蔵庫出張所等である。死者は五十三人であつた。多く死者を

出した家は、二丁目の羽二重岡田金次郎方で、妻と子供三人、洋服屋永見二男方では、夫婦外に義弟及姪三人、ミシン業上松五郎方で、子供二人、雇人二人である。鶴ノ橋は焼けなかつたので、向ふ側の伊勢佐木町、蓬萊町界隈の人々の多数は逃げて来て、港橋の焼ける前に、町民と共に公園内に避難した。一年後戸数は百六戸となつた。

八三三 吉 町

三吉町一丁目より五丁目までは、中村川の北岸に連なつて、千歳町と眞金町に接した長狭い地域である。災前の戸数各丁目合せて六百五十四、表通りは商家で、裏通りは主として職工及び労働者の住居である。震災では家屋の約七分通り倒潰した。續いて午後一時に五丁目より發火し、又千歳町方面の火も加はり、對岸中村町よりも四丁目に飛火して、三時頃には町内一戸も残らず焼失した。罹災建物の主なるものは四丁目なる増田氏所有の穀物大倉庫である。三吉橋東橋も焼失した。死者は二三丁目で十三人、四五丁目で四十四人、其外他町に出た者が一丁目で五人、二三丁目で五人、四五丁目で十九人を算する。一丁目では死者一名をも出さなかつた。四丁目の陶畫師橋富藏方では、妻及子女二人惨死し、主人も負傷の爲め死亡して、一家全滅となつた。町民の多く

は東橋車橋を渡り、或者は石炭船を操つて中村町の丘陵に避難した。四五丁目の者の一部は、間近な第三吉田小學校が一千坪あるので、初めそれに避難したが、火に圍まれさうになつたので、更に中村町に避難し、辛うじて死を免かれた。しかし荷物に心引かれた者は數十名、遂に其處で焼死を遂げた。一年有半後、家屋の約七分方復舊した。

九千 歳 町

千歳町一・二・三丁目は戸数約四百五十、表通りには商店多く、裏通りには主に技術労働者や、自由労働者が住まつてゐた。表通りは二階建が多いので、約八分方も倒潰したが、裏通りは概ね平家であつたので、倒潰したのは少なかつた。地面に大龜裂を生じた上、水道が破裂した爲め、水が氾濫して、龜裂箇所を覆ひ、それへ陥ちて壓死したのが兩三名あつた。約四十分の後、三吉町方面及遊廓方面からの火が襲ひ來り、更に對岸中村町河岸よりも飛火して、町内一面は猛火に包まれ、一戸も餘さず焼失した。死者は一丁目で十人、二丁目で十二人、三丁目で七人、外に他町に出でた者が十人内外ある。住民の多くは車橋及東橋を渡つて、中村町の丘に避難したが、東橋の火に包まれた後は、川船で渡つた者もあり、向ふ岸も火になつてゐたので、渡ることも出來ず、船にもぐり、身體中に水を

注いで、漸く焼死から助つた者もあつた。三吉町一丁目の空地に入つて猛火に襲はれながら、三四人の者が助つたのは不思議であつた。二丁目の織工鈴木龜吉氏は火中に三人を救ひ出だした功勞者だ。一年半後戸數は四百二戸であつた。

一〇 山 田 町

山田町一・二丁目は富士見町と相並んで、横濱遊廓の東に連なる町である。災前の戸數六百七十。住民は主として商人で、其の他は請負業、職工と通勤者である。家屋の倒潰は約六分通り、多くは大破程度であつた。町内よりは發火しなかつたけれども、約一時間を経て、遊廓方面及富士見町より延焼し、忽にして一面の火となり、町内一戸も餘さず焼失した。罹災の主なるは、一丁目なる淺草觀音分堂、個人では素封家山本慶太郎氏及白石作藏氏の邸宅であつた。死者三十八人外に他町に出でての死者約三十人を算した。一家全滅の家二戸を出だした。町民の多數は車橋を渡つて、中村町の丘上に避難した。扇橋の川中なる荷足船に入り、水を浴びつゝ助かつた者が、約七十人あつたことは、寧ろ天祐と謂ふべきであらう。

一一 富 士 見 町

富士見町一・二丁目は、山田町と相並んで横濱遊廓の東に續いてゐる。災前三百六十戸を有し、表通りは概ね商家である。裏通りは主として商店への通勤者、遊廓の傭人、職工等の住居である。全潰約六分通り、他は概ね大破小破で、大體一丁目は、二丁目よりも潰れ家少なく、市營の托兒所も潰れなかつた。午後一時頃、町内一丁目より發火し、之と相前後して遊廓方面よりも延焼し、三時頃には町内を悉く焼き拂つたが、五味質店の土藏一棟が焼け残つて、質物の安全なりしは、不思議だつた。焼失した主な建物は、市營托兒所、稻荷祠等である。死者の數は四十七人である。一家全滅の悲運を見た家は、二丁目の桶職森川傳藏方で、夫婦及子供一人、原田エイ方で主婦及子供二人である。町民の多くは、車橋及東橋を渡つて、或は川船で向河岸に著き、中村町の丘地に避難した。遁げ後れた約三十人は、千秋橋附近の岸の崩れに降りて、幸くも助かつた。

一二 山 吹 町

山吹町一・二丁目は、北は新吉田川に沿ひ、西は遊廓に連なつてゐる。災前戸數二百十

八を有し、表通りは概ね商家、裏通りは主として職工、沖人、夫船行商等の住居である。表通りは八分方倒潰したが、裏通りは概ねトタン葺の平家なので、約四分方の倒潰であった。地面は一般に低下して、所々に龜裂を生じ、河岸通り最も甚だしく、護岸は總崩つれとなり、尙水道破裂の爲に、町内一面に浸水した。約五十分して、遊廓方面からと、富士見町方面からと、猛火が襲來し、三時半頃には町内悉く焼失した。罹災の主なる建物は、一丁目私立警醒學校、田中鐵物倉庫等で、橋梁では武藏橋は破壊の上焼失し、山吹橋は破壊の上一部焼失した。歿死者を擧ぐれば、町内で二十四人、他町に出で十三人、伊勢佐木町方面より遁がれ來り、當町で焔に包まれたのが五人、町内にては齒科醫院で治療中の他町の人が二人焼死した。二丁目の彫刻業佐谷徳教氏は永年町内の衛生組合長を勤め、公共の事に熱心であつたが、同人並に子息夫妻共に歿死して、一家全滅となつた。住民の大部分は路上の溢水で火熱を防ぎつゝ、南方に走り、東橋を渡つて遊行坂方面に避難したが、橋の煙に包まれた後は、川船の助を得、辛うじて向岸に達した。一年有半の後、戸數百九十。其九分通りは震災前の家である。

一三一 眞金町 永樂町

眞金町並に永樂町は、横濱遊廓で、廓内は約二萬坪の別天地である。廓内の東方が永樂町、西方が眞金町である。街路が縦横に交叉して、貸座敷八十三戸、引手茶屋九戸、藝妓家六戸、其の他飲食店、遊戯場、普通商店及び住宅等を合せて、總戸數四百十九、人口四千五百人、全人口中、娼妓約千人、藝妓五十餘人を含んでゐた。廓内一帯は埋立地であるし、殊に二三階の建物ばかりであつたので、第一震が來ると、反町樓を残したのみで、後は全部倒潰した。

地割、溜沒等が所々に生じ、濁水が噴出して、四邊は水溜となつた。遊女達は悲鳴を擧げて逃げ遂つた。十二時二十分頃、火は眞金町數箇所から發火し、三吉町方面からも延焼して來て、折柄の西南風に煽られて、廓内は猛火の荒れ狂ふところとなつた。神風樓、二葉樓等、主だつた妓樓を初め、全部灰に化した。

死者の數は、凡そ四百五十名で、娼妓の死者はこの數の半分二百二十名であつた。樓主の死者九名、ヤリ手、妓夫、太郎等の死者は百二十四名であつた。各樓の娼妓は、多いのは二十名以上で、少ないのは十人以下であつた。美好樓では主人安藤利喜藏夫婦、老母と子供三名の他、娼妓十名であつた。神風樓山口美代方では若主人が生き残つたばかりで、主人家族、娼妓等二十三名慘死した。廓の周圍はトタン板で嚴重に圍まれてゐた。

ので、通用門も、非常門も直に開けられたが、逃げるには障害が澤山あつたので、死者を多く出したのであらう。同町の住民は、殆んど中村川方面に逃げ、東橋と三吉橋を渡つて、間近である中村町の丘上に避難したのである。しかし程なく、二つの橋は焼け落ちてしまつたので、遅く逃げて来た者は、橋を渡ることが出来ず、南吉田町の第三小學校運動場に避難した者は、全部焼死した。

縣立眞金町病院は、二階木造の大建物で、當時は清水院長及職員數名の外看護婦十一名がゐた。病妓は七十六名收容中であつた。

病舎が全潰するや、間もなく火は發した。院長は部下を指揮し、救助に努めたが、娼妓九名看護婦一名雇人一名の死者を出した。焼跡には看護婦高木ユキ三十が、病妓二名を抱へて焼死してゐた様は無慘であつた。

震災後、遊廓は間もなく改復し、大正十三年の調査に據ると、廓内の戸數は四百六十戸、妓樓は六十九戸である。

遊廓の裏通なる眞金町は、普通の街で、震災前戸數は百八十二戸あつて、商店職工勞働者等の住宅で、公設市場もあつた。

家屋は七分通り倒潰し、火は三吉町から發火し、忽ち全家を焼失した。死者十九名。

住民は三吉橋、東橋の焼けない間は、中村町の丘に逃げる事が出来た。

一四 南吉田町 四―七ツ目

南吉田町は明治二十年頃吉田新田の沼地を埋めて立てた町であるから、地盤は軟弱であるには違ひない。激震と共に五千三百の家屋は、殆んど全部倒潰した。

南吉田町東部 南吉田町の中央を流るゝ新吉田川の以東の地域である。震災前は約二千六百戸を有してゐたが、第二激震で、その八分通りは倒潰した。僅に破損した建物は、南吉田第一第二第三小學校のみであつた。地割れ、崩壊等數箇所が生じ、中にも堀割川に沿ふた久良岐橋から千歳橋に至る川岸通りは、大部分川中に崩落した。火は町内數箇所から發火し、その火脚の最も早いものは、千歳橋附近、三吉橋附近と第一南吉田小學校附近からの火で、折柄の烈風に火勢を強め、早くも新吉田川方面に延焼して來て、午後五時頃には、全地域は一戸残らず焼失した。焼失した主要な建物は、第一第二第三南吉田小學校、米國ヅァキュームオイル會社、テキサスオイル會社、岩井鐵工場等であつた。橋の被害は、三吉橋、道場橋は焼失、久良岐橋、千歳橋は破壊、日本橋、横濱橋は破壊、道場橋は重油の火で眞先に川に流れ落ちた。三吉橋は三時半頃焼け落ちた。

この地域の人の避難場所は、中村川の橋を渡つて、中村町又は堀之内の丘に逃げ込むより外に道はなかつたので、辛くも焼け残つた久良岐橋と千歳橋とは、この地域の避難者にとつては生命の綱であつた。青年團員の決死的活動に依つて、向ふ岸へ、川船に乘せられて渡された避難者は、二千以上であらう。逃げ遅れた人々は、中村川の沿岸の萬治病院跡の廣場や、第三南吉田小學校の校庭に逃げ込んだが、ほつと一息つくまもなく、向ふ岸の中村町の縣揮發物貯藏庫に火が入つたので、火になつた重油は流れ出して、四邊一面を火と化してしまつた。猛火に包まれてしまつては、避難者たちはもう絶對絶命であつた。男たちは燃えてゐる道場橋や、三吉橋を渡つて、辛くも向ふ岸に辿りついたけれども、老人、女子供にはそんなことは出来ないで、そのまゝ焼死したのである。此の地域の死者は、その數四百八十四人で、大部分は壓死であるが、焼死者も尠からずあつた。

南吉田町の西部 南吉田町の中央を流るゝ新吉田川以西の地域が南吉田西部である。震災前約二千六百戸を有してゐたが、第一震第二震に、その九分の建物は破壊した。倒潰を免かれた建物は、僅に日枝神社と、稻荷神社とであつた。火は激震後間もなく、南六つ目四百八十番地邊から發火した。次いで、各所からも發火し、火力は猛烈となつた。

なつて、見る／＼全家屋を焼失した。火は北部一帯を焼き拂ひ、午後四時頃風の變ると共に、火先を逆に轉じて、更に西南部一帯を焼き拂つた。飛地の西川外も蒔田町からの火を受けて、其北部を焼かれた。稻荷神社は焼失したが、日枝神社は危険が迫りながら、不思議にも火災を免れた。當日は拜殿の新築中であつたので、葎で拜殿は圍まれてゐた。突然火の子は葎に飛んで來たので、危く大事に至らうとしたが、神主たちが協力して、直に叩き消してしまつた。震災後、日枝神社が燃えなかつたのは、全く神さまの靈驗である。氏子達は思つて、皆揃つて熱心に信心をしてゐる。本地域の主なる建物は、第一、第二日枝小學校、笠原輸出織物加工場、長町卸工場、龍華絹絲紡績會社等で、其の他二、三の工場、會社があつた。焼失した橋は、共進橋、葎屋橋、一本橋、萬治橋、南吉田橋であつた。日枝橋、池下橋の二つが焼けなかつたことは、住民にとつて幸ひのことであつた。

南吉田町中部 南吉田町中部は、震災前戸數百卅九、表通りは多く商家である。激震起ると共に、市電日本橋出張所と、亞鉛葺の長屋十戸とを除く外、悉く倒潰した。河岸通り許りでなく、至る所に龜裂を生じた。火は家屋が倒潰した後間もなく、地元の支那料理店から發火したが、直に消しとめた。暫くすると、駿河町三丁目と、長者町五丁目とから火を發し、ついで南吉田町の西部の火が、延焼して來た。三面から包圍して來た猛

火は、忽ちの中一戸も残らず焼きつくした。

死者と行衛不明者とが二十九名あつた。清水五郎藏方では、一家五人と來客一人の死者を出し、旅館塚田暉一方では、一家三名死者を出した。住民の約七分通りは、向ふ岸で火に追はれない中に、駿河橋日本橋横濱橋を渡つて、中村町方面の高臺に避難し、二分通りは山王橋道慶橋等を渡つて、久保山方面に避難した。

平野坂定楠氏と茂手木重幸氏との二人は、六十名の避難民を船に乗せて、無事に堀之内へ避難させた。一年有半後の戸數百名。歸つて來たのは、表通りの商店五分通りである。

第四節 市の西南部

堀内瀧頭礪子岡村の各町は、蒔田大岡の二町に續いてゐる大地域で、市の西南部に在る。堀内南は瀧頭町、その西南礪子町、更にその北は岡村町で、堀内と瀧頭との間には、根岸町の一角が堀割川を挟んでゐる。そこに横濱刑務所の建物がある。此の地域は、一帯に丘陵地が多いので、人家は少ないが、川添ひや、海に添ふた所は、平地で、市街となつてゐる。震災の影響は餘りひどくなかつた。火災は各所から起つたが、大事に至らなかつた。

つた。而かし山崩れは此地域に最も多く、中にも礪子町では、山崩れの爲め多くの死者を出した。

一 堀内町

堀内町は蒔田町の東、中村町の西にある。同町の字新川の一部分は、堀割川の對岸に延びてゐる。多くの字が一つとなつて、市街を成してゐる。地域の北にある字宮田門前、石島清水谷女坂邊りは、商家と住宅とがある。しかし、其の他の字は丘陵地であるから、人家は極めて少ない。戸數六百五十四の中、全潰百二十四戸、半潰六十八戸であつた。唯、セールフレザー商會の製材工場七棟が發火し、焼失したぐらゐるものであつた。これに續いて亞鉛鍍金株式会社も焼失した。宇女坂の縣爆發物貯藏所が半潰したが、爆發しなかつたのは、何より幸ひであつた。

他町からの避難者は約四千名で、何れも緣故を頼つて寄寓した。震災になつて、移住者が澤山やつて來た。その爲め漸次戸數を増して、根岸刑務所裏手の、字荒畑などは、震災前五戸に過ぎなかつたのが、一年後には數十戸になつた。當町寶生寺の境内には、新に震災回向所假堂が建立された。これより先き震災後遭難者の冥福を祈る爲めに、横

濱公園、其の他市内各町で、塔婆や墓標を建てたが、復興に連れて、そのまゝにして置くことも出来ないで、十三年七月、神奈川縣大震災法要會の發起で、有志の贊助を得、縣市に於ける遭難者の回向所を寶生寺に建て、墓標や塔婆等を納めたのであつた。十三年九月一日、盛大な震災一週年忌の大法要を施行した。

二 瀧頭町

瀧頭町は一部丘陵地、一部平地で、堀割川が東部を流れ、海に注いでゐる。そこに原の一字があり、川口に別に埋立地がある。戸数は約千戸、人口約四千五百。勤め人の住宅最も多く、商店も相當にある。震災の影響としては、八幡橋の西、字濱上、江北田等の市街地が、被害甚だしく、戸數約三分の一は倒潰した。その他各字では、概ね大被害を免れた。倒潰した主な建物は、市電氣局車庫、眞言密藏院、三井物産會社製材工場、八幡神社輸入獸類檢疫所等で、扇ヶ谷の市立萬治病院も數棟の建物が破壊した。山崩れは前述のやうにひどく、扇ヶ谷では丘の中腹に大龜裂を生じて、水田の中に碎れ落ち、その反動で、前方の水田を七八尺も押出した。崖崩れは、道路を山のやうに埋めて、萬治病院の裏門や、塀を破壊した。磯子近くの伊勢山の崖崩れも、亦甚しかつた。その邊には、人家がなかつ

たので、崖下で人夫が一人壓死したに過ぎなかつた。

火は零時十分頃、字北田の市電氣局裏手の住宅から發火し、その附近の家屋を數十戸焼き拂つた。死者はこの町では無く、外出中の者で二十名許りあつたらしい。根岸刑務所を出た者たちに、人々は恐れを抱いたが、彼等は割合に善良で、焼けた家々の後片づけを手傳つたりして、報酬に食事を貰つて喜んでゐた。震災後、この地へ移轉して來た者が多くあつた。一年半後には、戸數約二割殖えてゐた。

三 磯子町

磯子町の西北は丘陵地で、東南は海を控えた海岸街で、景色のよい所である。震災前は戸數千五百戸と、新築の家が約五十戸あつた。字濱は海岸地だけに五百戸あつた。字禪馬には二百戸、禪馬の東北なる字廣地には戸數同じく二百戸あつた。大道筋には商店軒を並べてゐるが、他は多く住宅である。字濱は埋立地であるから、被害も多く、約五百戸の中、倒潰約百五十、半潰二百を算した。字禪馬、字廣地は磯子に次ぐ被害を受けた。罹災した重なる建物は、廣地の磯子小學校、半潰禪馬工場、半潰金藏院等である。崖崩れの最も激しかつた所は、料理屋借樂園の附近であつた。同園の裏には七間も崖が切

り立つてゐたが大震が起ると同時に、恐ろしい地響き立て、長さ約八十間、幅十數間、坪數約一千坪の斷涯が崩壊し、偕樂園の一部である三棟の家屋を押し潰した。その中で女中が十六名慘死した。附近の民家一棟も亦埋没して、家人三名は生き埋めとなつた。この外丁度崖下を通つてゐた數名が生理めとなつた。程經て幾人かの遺骸を發掘したが、崩壊の土石その面積は約四千坪もあつたので、到底掘り上げることが出来なかつたので、そのままにしてある。尙この地域には、和田山にも、長さ約六十間の崖崩れがあつた。海岸の所々に、地割れが出来た。石垣の破壊した處は多數あつた。

次に焼失家屋は、濱は六十三戸、禪馬は五戸、字間坂は三戸であつた。類焼が少なかつたことは、町民が協力して消防に努めたからである。町内の死者は、濱は九人、禪馬は三人、谷は一人、廣地は二人、山田は三人、間坂は一人であるが、これに偕樂園附近の死者を加へると、四十人である。他の町に出てゐて、行衛不明になつた者は十名あつた。前記三人の死者を出した家は、三好屋といふ俵宿であるが、その後主人は悲嘆の上、自殺を遂げたとのことである。濱の運送業掘の家でも、夫婦と子供一人が共に壓死した。

震災後、各方面から多い時に避難者一萬五千人も來た。中には假屋を造りて住む者もあつた。火災の甚しくなかつたのは、何よりの幸ひであつた。町は一年半後、次第に

復興し、震災前よりも却つて戸數も殖えて、一千二百七十戸の外、新築家屋が、二百も建てられた。殊に大通りは、道幅も廣くされて、電車も通じて町の面目は一新された。

四 岡 村 町

岡村町は市の西南に在る一帶の丘陵地で、その邊は畑である。面積は廣いけれども、人家はあちこちの谷合ひに散在するのみで、その數は僅に百十餘戸に過ぎない。家は、大抵百姓家で、藁葺である。震災の影響は極く僅かで、倒潰した家屋は二十戸、半潰は三十五戸であつた。火災はなかつた。

破壊した寺院神社は、字仲久保の岡村天神で有名なる天満宮、眞言宗金剛院、曹洞宗龍珠院等であつた。中にも天満宮の被害は、他よりもひどく、拜殿は半潰、神樂殿は全潰した。字仲久保の地先では、長さ三十間、幅十間の崖崩れがあつて、家を一戸埋没し、女一人壓死した。

第五節 蒔田 大岡町方面

一 蒔田町

蒔田町は地域の約三分の一が市街地になつて、三分の一が丘陵地で、更に三分の一が田畑であつた。この中市街地の八分通りが、火災に罹つたのである。即ち町内十八字の中で、廻坪・六反目・井領田宮之脇・三反田・居尻・榎木坪・門田の八字は全部焼失し、一本松堂・面宿・山之根西の五字は七八分焼失して、町内約三千戸の内、約二千五百戸を焼いたのである。大震が突發すると同時に、宇榎木坪・居尻・六反目の邊りは大被害を受けた。家屋は概ね倒潰した。しかし他の字は半潰を僅かに出したばかりであつた。倒潰した建物で主なるものは、英和女學校・勝國寺等であつた。片岡醫院は崩壊の爲、院長夫妻・子供一名看護婦數名が壓死を遂げた。字伊勢山は、特に龜裂が甚しく、其長さ三十四間幅四間もあつた。

火は家屋の倒潰後數分も経たぬ間に、町内數箇所から發して、居尻・榎木坪は忽ち焼き盡され、折柄火は南風に煽られて、火勢は一層加へられた。隣接の大岡町も、亦三箇所から發火して、當町の方へ迫つて來た。午後四時頃になつて、遂に當地の火と合し、益々燃え

擴がつて、東北に延び、橋を焼いて南吉田町の火と連り、火は燃え狂つて四邊を火の海と化した。同地は震災後徐々復興してはゐるが、今日ではまだ舊に復しない。

二 大岡町

蒔田の西南に連なつてゐる町で、蒔田町と地勢が似てゐるところである。被害の状態も蒔田町と同様であつた。市街地の家屋は約半は半潰、或は大破した。丘地では少しばかり破れた位のものであつた。大岡川の堤防には、大小多數の龜裂を生じた。火は中央なる高等工業學校及町内の三箇所から一齊に發火し、東北に向つて延焼し、忽ちにして市街地を一緘めにした。四時頃になつて、更に蒔田町に延び、遂に南吉田の火と合した。

町内は各字にして云へば、目貫場所の釜田・大橋・詰中島・樋之口・通町の五字は殆んど全部焼失し、石鼻宮之前・堰之上の三字は、過半焼失した。字中之町と、久能下との二字に跨つてゐる高等工業學校も焼失した。町内約一千二百戸の中、約八百戸の類焼を出したのである。焼失の主要な建物は、高等工業で、同校は當市唯一の官立學校で、木造教室附屬建物の大部分は、激震と共に倒潰した。化學實驗室内二箇所から發火し、二三の小建

物を除く外、悉く焼失した。午後一時半頃、飛火を通町に送つたのである。斯くて学校の被害額は、器具・標本類等を合せて、四十七萬餘圓に上つた。當時は休暇であつたから、學生には一人も被害者を出さなかつた。町内の死者は百二十名であつたが、多く勤め先で死んだものである。

當町の發火は忽ちに起つたので、字地の住民は、命からん、逃げたのであつたが、餘裕は十分あつたので、家財などを持つた者もあつたから、大岡川・田畑などに、荷物などが落ちてゐた。この地は格別焼死者を出さなかつた。翌日頃から埋立地方面の罹災者が、老人や子供を連れて、續々避難に来て、手蔓を求めて、丘地の残つた家に寄寓し、手蔓のない者は河邊などに形ばかりの假屋を立て、救護物資の配給を受けて、暫く露命をつないでゐた。地元の罹災民も同様であつた。又朝鮮人の噂は他の地と變らず、二三兇事もあつた。要するに本街は被害は甚大であつたが、市の中央部に比しては、其被害少なかつたことは、不幸中の幸であつた。町民は之れをせめてもの心遣りとして、中央部の大被害に同情を爲し、只管一家一郷の復興に努力した。その後中央部から移住する者も多く、新しい家が出來て、一年有半には、町内の戸数が、震災より増して、約三千三百戸となつた。他には見られない盛んな復興の様であつた。

第四章 本市第四方面

山手町——北方町——本牧町——根岸町(堀割川以東)——上野町——千代崎町——中村町(堀割川以東)
石川町——石川仲町——元町——諏訪町

第一節 一般狀況

第四方面は、市の東南部を占める一帯の丘陵地を區域として、北は中村川と其の下流の堀川を隔て、關外關内に隣り合せ、西は堀内・瀧頭及磯子の各町に接し、其の境邊に堀割川が鑿たれ、東と南は崖となつてゐて、其の下は東京灣に臨んでゐる。域内至る所丘陵起伏して、所々に方言で谷戸といふ溪谷地がある。尙四邊の崖下にも平地がある。丘陵地は山手町を除くの外、概ね人家は澤山ないが、溪谷地及低平地は町になつてゐる。上野町・千代崎町・石川仲町・石川町・元町・中村町などは、何れも商店住宅も相當あつて、賑やかであつた。山手町は歐米人の住宅地で、早くから拓かれた所で、洋館が立ち並んでゐた。本地域に於ける震災の影響は、山手町が丘陵地でもあつたに拘らず、震害火災共に激しく、慘害を呈した。